

千葉県鴨川弁天島に関わる
地域社会と信仰の考察

宇
田
哲
雄

はじめに

日本の民衆に広く信仰されてきた神仏のひとつに、弁才天（弁財天）がある。弁才天は、古代インドのヒンドゥー教におけるサラスヴァティー（Sarasvati）河が人格化された女神が仏教に取り入れられ、我が国では、市杵嶋姫命等と習合し、水の神や海の神、漁業の神、幸福・学問・弁舌・音楽・除災の神となっている。

また、弁才天を景観より見ると、海上や湖沼の島に祀る例が非常に多い。よく知られる例としては、北九州の沖ノ島や安芸の厳島、琵琶湖の竹生島、相模の江の島や宮城の金華山島等があげられる。このうち竹生島（『竹生島縁起』『帝王編年記』）と江の島（『江島縁起絵巻』）は、島の出現伝承も伝えられている。我が国には、「弁天島」と称して弁才天の女神が祀られる海や湖沼の島は実に多く、日本地図で確認しても百箇所を下らない。また神社や寺院の境内に祀られる弁天社は、この景観的特徴を模したように、周囲に堀を巡らせ、参道に橋を設置している社も数多い。

歴史学の笹間良彦は、この弁才天の景観的な特徴について、弁才天が宇賀御魂神や宗像三女神と習合したことにより土地や水に縁あるものに関係する人々の信仰をかり取り、日本古来の女性崇拜や古代の女菩薩思想、大衆の理想郷思想が託されたとして、池沼の中島や水辺の神聖な場所に居ます弁才天は、龍宮の乙姫様のイメージと合致したのだと論じている。^①

以上のことから、弁天島と弁財天信仰の研究は、海上や海中の他界をも視野に含めた、海の神や海洋への信仰の様相と特色、歴史を明らかにしていくうえでの重要な研究課題となるであろう。

一方、弁才天に限らないが、宗教民俗学の五来重は、もとは海の彼方の常世から神が島伝いにやってくるという信仰があったことを指摘し、景観論の野本寛一も、海の立神岩や先島、湾口島は、本来は海の彼方からやって

来る神の飛び石であるとする信仰を論じている。^③

本稿では、日本人の海洋信仰の特色の一端を明らかにすることを目的として、南房総海岸地域の鴨川市で通称「磯村弁財天」と称する弁天島とその地域を対象として、信仰の様相と変遷について考察し民俗学的に研究する。

一 千葉県鴨川市磯村字弁天島の概況

千葉県鴨川市磯村は、千葉県の南東部、JR安房鴨川駅から約1kmの距離に所在する。加茂川が東の太平洋に注ぐ河口の南側に位置し、その北側に前原、北西側駅周辺を横渚、西側に貝渚が接している。その東側の海に弁天島が浮かんでいる。

磯村は、一五世紀後半の京都聖護院門跡であった道興准后による東国巡歴の紀行誌文集『廻国雜記』に「磯部の村」として紹介されており、一五世紀にはすでに存在していたことが確認できる。戦国時代から慶長一九年（二一四）に改易されるまで安房国の領主であった里見家が慶長年間（一五九六―一六一四）に家臣の身分・役職や禄高などを記録した『里見家分限帳』と称する帳簿には、「高二四石五斗 御蔵入 磯村、但し町割り地は金子にて上納」と書かれており、磯村は、村高二四石五斗の小村であったが、船宿や旅籠も営業し町場が形成され、町場の年貢が金子（貨幣）によって納められていたことが知られる。陣屋町・殿町・北町・新町などの小字名は、その名残である。^④

明治七年（一八七四）に横渚より前原町が分離独立し、明治三二年（一八八九）三月に磯村・貝渚・横渚・前原の四町村が合併し鴨川町となった。明治期の鴨川町は東京・勝浦間の汽船が寄港し、長狭街道をはじめ多くの里道が交差し、物質の集散、人物・車両の往来が盛んであった。こうしたことから移住して住み着く人も多く、磯村は、地元では「磯村千軒」と言われるほどであった。^⑤

鴨 川 略 図

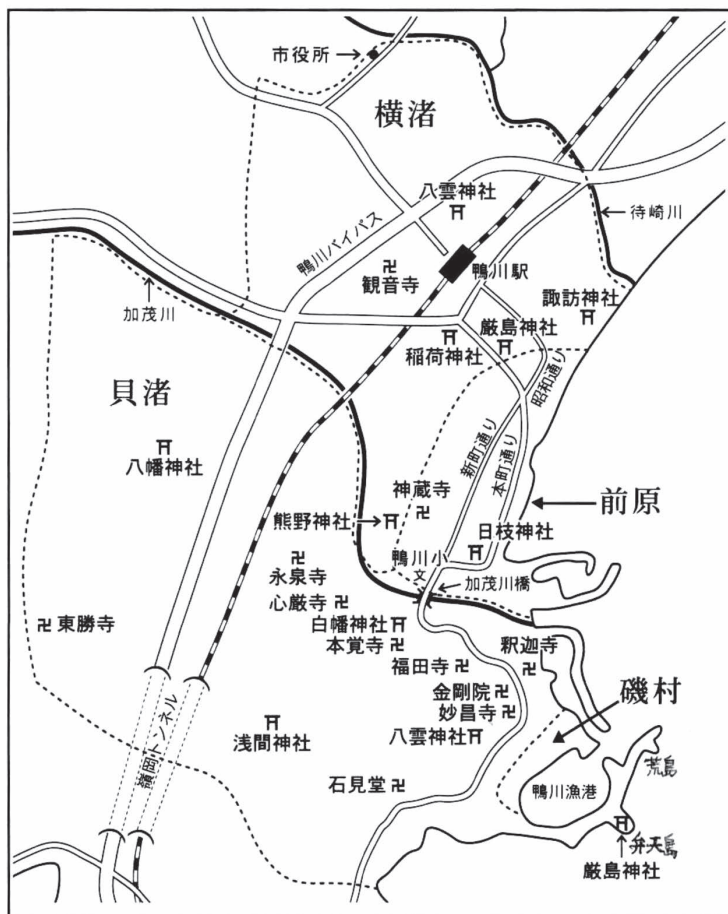


図 鴨川略図（鴨川市教育委員会『鴨川町のあゆみ』より）

しかし大正五年（一九一六）の『鴨川町誌』には次のように記されている。

往時は前面の弁天島に連接し、戸数七〇〇有余、沿海著名な漁村なりしも、年々土地欠壊流亡し、居民その渚に安ずる能はず、漸々退去して貝渚地に移住し、現今の戸数七〇余、反別九反一二歩を余すのみ。^⑥

そしてこの頃、住所番地とは別に、磯村と貝渚の一部を「大浦区」と称するようになり、鴨川町は、前原・横渚・貝渚・川口・大浦の五部落となった。

漁業の面については、明治一二年（一八七九）に磯村・貝渚連合戸長役場が郡部長に提出した『漁業沿革誌』をもとに、『鴨川町のあゆみ』につきのように記されている。

磯村は戸数九〇戸で、貝渚村とほとんど一村のような状況であった。漁獲はイワシ・サバ・カツオ・マグロなどであった。カツオ漁は天文十年（一五四一）ころ起こり、慶長五年（一六〇〇）ころマグロ漁が起こり、享保五年（一七二〇）に八手網が登場する一方、イカ・サバ・タコ漁が起こった。

イワシ漁は、船三隻で一隻に二人乗り込み、一・五キロメートル沖に出て八手網で漁獲した。八手網は風呂敷のように網を張り、イワシが網の上に来たときに引き上げた。サバ漁は釣り漁で、イワシ漁よりも少し沖に出た。サンマ漁は船三隻で一隻に一〇〜二人乗り込み、一〜二キロメートルほどの沖に出た。そして二隻の船が左右に漕ぎ分かれて魚群を囲み、残りの一隻が海面を竹竿で叩くなどして網に追い込んだ。漕ぎ網と呼ばれる漁法である。カツオ漁は釣り漁で、船一隻に一五〜一六人乗り込み、一〇〜四キロメートル沖に出た。マグロ漁は船一隻に一二〜一六人乗り込み、八〜一六キロメートル沖に出て、一本の縄に枝縄を結んで針をつけた縄釣り漁を行った。^⑦

これらの漁では、清澄山と浅間山が「ヤマアテ」の山になった⁽⁸⁾。また前原浦における地引網漁は、江戸時代中頃から三張りの地引網が、仲間組織をつくり経営・操業していた。漁獲した魚は、そのまま売却したほか、ひらき・干物にした。干鰯やメ粕、カツオ節として加工することもあった⁽⁹⁾。

これに対して、岩礁に富む海岸線は、磯根資源に恵まれ、アワビ・サザエ・エビ・海藻などの浅海漁場となっている。磯の岩場を「ネ」、砂地を「クマ」という⁽¹⁰⁾。海士や海女が潜り漁を行う。

漁業の同業者組織として、明治二年（一八八八）に安房東海漁業組合が設立され、明治三六年（一九一三）に鴨川漁業組合が発足、これは大正二年（一九一三）頃に鴨川町漁業組合に名称変更した⁽¹¹⁾。他に小型船組合、掛網（海老網）組合、海士組合、釣り船組合などが組織されており、他に魚を商売する鮮魚商組合や煮干しやカツオ節などに加工する加工組合がある⁽¹²⁾。

その後昭和四六年、鴨川市が誕生した。この弁天島に祀られ、海の神様、大漁万作・海上安全・開運繁栄の守り神として信仰されてきた厳島神社が、通称「磯村弁財天」である【図・写真1参照】。

以上、弁天島が所在している千葉県鴨川市磯村について、歴史と漁業について概観した。次章からは弁天島（磯村弁財天）の起源伝承と祭礼習俗について考察する。



写真1 鴨川漁港と弁天島（右）、荒島（左）

二 鴨川弁天島に関わる起源伝承

磯村弁財天の開創に関する近代の文献資料として、『千葉県寺院明細帳』『鴨川町誌』『千葉県神社名鑑』があり、以下古い史料から順に紹介し考察する。

○海満山金剛院の縁起伝承（千葉県寺院明細帳・明治一五年）

まず、最初に弁才天像が安置されたと伝えられており、長年にわたって磯村弁財天の別当寺を努めた金剛院の縁起伝承を見ていく。金剛院は現在、真言宗智山派に属している寺である。慈覚大師作と伝えるご本尊の観音菩薩立像の隣の厨子に、やはり慈覚大師作と伝える弁才天座像を安置している。

『千葉県寺院明細帳』は、明治一五年（一八八二）に千葉県の照会に対する各寺院からの回答をまとめたものである。次に引用した文章は、詳細な年号・月を記していることから、明治一五年当時には、本書が参照した縁起の古文書資料が存在していたことが推測される。

承和十三丙寅年九月慈覚大師回國ノヲリ、海中ヨリ光明輝キ其中ヨリ仏音ヲ發シテ曰ク汝ヲ待事久シ。則辨才天女ノ御姿ヲ顯ハシ給エ、吾レ此島ニ長ク有テ一功衆生ノ貧窮ヲ救ハント。宣テ依之大師右等本尊並辨才天女ノ御姿ヲ御自作有テ安置シ奉リ、時ニ海満山金剛院ト号シテ創立。建久四癸丑年十月中興第一世祐海。寛延年中迄寺並ニ境内等磯村字山ノ腰ト申處ニ有之。處漸々波欠ニ付宝歷元辛未年正月現今出町エ轉寺。

（同説不可）

これは、承和一三年（八四六）に慈覚大師が諸国を巡っていた折、海中から光明が輝き仏音を發し、「久しく貴

方の来訪をお待ちしていた」と、弁才天女がお姿を顕しになり、「私はこの島に長くおり一功衆生の貧窮を救いたい」と言った。そこで大師は、ご本尊と弁才天像を自作し、海満山金剛院を創立したという開創伝説である。

これは、弁才天女の示現と靈験を伝える伝説であり重要である。また、寺の開創を説きながら、本尊である観音菩薩より、弁才天女の示現と作像に重点を置いて説いており、両像を安置して寺が創立されたと述べている。「吾レ此島ニ長ク有テ」とあり、この頃すでに弁天島（当時は浮島）が信仰されていたと推察されることが注目される。現在も現地で、弁天島はかつて金剛院の土地であったと伝えられており、弁才天が祀られる前から、たとえば行場など金剛院の管理下に置かれた神聖な島であったこと、または当院の管理以前から古代信仰によって神聖視される島であったことなどが考えられる。また、慈覚大師開創から当初は天台宗寺院であったと推察されるが、建久四年（一一九三）十月の中興により、何かの経緯で真言宗寺院に改宗、再興されたと考えられる。

なお、寺と境内は寛延年中まで山ノ腰にあったが、年々敷地が波に削られ、宝暦元年（一七五一）に今出町に移転した。また現住職からは、とくに元禄の大津波による被害が大きかったと伝えられている。

○千葉県鴨川町『鴨川町誌』（大正五年）

次に、大正五年（一九一六）の『鴨川町誌』の「厳島神社」の項には、次のようにある。

磯村字弁天島に在り。祭神市杵島姫命、官有境内三六〇坪。六十一年目ごと、己巳の歳三月開帳大祭を行う。船橋を架設して群衆を渡島せしむ。その盛況東都の錦絵に出る。

創建年暦不詳。伝えて曰く、金剛院中興開基たる慈覚大師自作の尊像を境内に奉祀し、永年当院別当たり。寛永十八年頃、弁天島に遷宮し奉る。元禄十六年十一月二十三日の津波にて、神体流失して久しくその儘にありき。宝永元年の頃漸く発見し、祠を再建して奉祀せり。後、宝暦五年二月本社を造営す。¹⁴

これは、まず六一年目ごとの巳年御開帳を紹介し、創建は不詳で、慈覚大師は別当寺金剛院の中興になってい
る。金剛院境内に安置された大師作の弁財天像を、寛永一八年（一六四一）に弁天島に移して安置し遷宮したこ
とがわかる。しかしながら元禄一六年（一七〇三）の大地震に伴う大津波によってご神体像が流失し、翌年の宝
永元年（一七〇四）に発見されて祠を再建し、その約五〇年後の宝暦五年（一七五五）に本殿が造られたとある。
本記述によれば当弁財天は、当初は中興した慈覚大師が金剛院境内に安置し、当時弁天島は浮島と称されて、
弁財天は祭祀されてはいなかったと考えられる。とするならば、何故に寛永一八年に前面の浮島に弁財天を移し
祀ったのであろうか。

これらを踏まえて平成二三年の鴨川市教育委員会編纂『鴨川町のあゆみ』でも、慈覚大師が観音菩薩と弁財天
女の尊像を自ら刻み、一寺を中興して納め、寛永一八年に、磯村前面の浮島に分霊を祀り弁財天像を納めて、「浮
島弁天」と称したとしている。¹⁵⁾

○千葉県神社庁『千葉県神社名鑑』（昭和六二年）における「由緒沿革」

昭和六二年に成立した、千葉県神社庁『千葉県神社名鑑』における「厳島神社の由緒沿革」には、次のように
記されている。

平安朝時代仁明天皇の承和年間（八三九）、唐より帰朝した慈覚大師が当地巡錫の折、弁財天女の御姿を自
作して此処に安置したと伝えられる。往時は浮島弁財天といわれ、大漁万作・海上安全・開運繁栄の守り神
として多くの人に崇敬されている。¹⁶⁾ 現在の弁財天像は江戸時代徳川吉宗の享保一五年（一七三〇）御万方大仏
師李之進の謹作といわれている。

また本書には、祭神は市杵島姫命、例祭日は一月一四日、氏子四〇〇戸、宮司鈴木博明と記されており、神事芸能には巳年と亥年の式年大祭御開帳について記されている。

当厳島神社は、平安時代承和年間に慈覚大師が造った弁財天女像を安置したのが始まりであること、往時は「浮島弁財天」と称し、大漁万作・海上安全・開運繁栄の守り神として崇敬されていること、とくに元禄一六年（二七〇三）の大津波について言及していないが、現在の像は享保一五年（二七三〇）の御万方大仏師奎之進の作であることなどが述べられている。

以上本章では、弁天島に関わる起源伝承について、明治一五年『千葉県寺院明細帳』の別当寺金剛院の報告、大正五年『鴨川町誌』および昭和六二年『千葉県神社名鑑』の厳島神社の報告という三つの文献資料を調査分析した。この弁天島に関わる三つの開創伝説資料は、若干の相違はあるが共通することは、三伝説とも弁財天の開創に慈覚大師による作像を伝えていることである。

しかし異なる点をあげれば、弁才天女の示現と靈験を伝えているのは最も古いと思われる金剛院の縁起のみであり、『鴨川町誌』は寛永一八年の弁天島への遷宮を伝えている。また、注目される相違点は元禄一六年の大津波をはじめとする被害への対応で、金剛院縁起では寺・境内の移転であり、『鴨川町誌』ではご神体流失と発見、祠再建と後の本殿造営、『神社名鑑』では被害よりも新尊像の祭祀を語っている。これらは、明らかに大津波被害に対する復興を言っているのであるが、それぞれの説明に相違があるのは何故であろうか。おそらく元禄の大地震を中心とする大津波による被害からの復興経過の時代に、弁財天の祭祀のあり方に何らかの変化が生じたことを窺うことができるのである。

地元ではかつて金剛院がもっと弁天島に隣接していたと伝えられるが、『鴨川町誌』にも磯村が「往時は前面の弁天島に接続し」ていたと記し、昭和三〇年頃までは干潮時に磯を足を濡らしながら歩いて島へ渡れたと伝えられていることから考えると、かつて弁天島は現在よりも磯村に近しく隣接していたことが推測されるのである。

三 鴨川弁天島の祭礼習俗

○祭礼

磯村弁財天にて現在行われている祭礼は、毎年正月四日の「大漁祈願祭」で、御簾ごしに開帳し、宮司によるご祈祷の後、玉串奉納、鴨川市漁業組合をはじめ、小型船組合、掛網組合、釣り船組合、鮮魚商組合、加工組合の代表者、漁業組合直属のアグリ網（定置網）船主が大漁祈願を行う。翌一五日は一般の人達が参拝する。お札が配られ、漁師は、このお札を船の真ん中のハト箱に祀られている船霊様の棚にお祀りする。

また各船の正月の「乗り初め」は、船で弁天様の沖をまわって安全と豊漁を祈る。

○式年大祭（巳年本開帳・亥年中開帳）

六〇年目及び三〇年目に行われる「式年大祭」は、それぞれ巳年本開帳、亥年中開帳といわれ、岸より島までの海上に船橋が架けられ、神輿や山車も繰り出して盛況である

【写真2参照】。



写真2 厳島神社大正12年（1923）亥年中開帳（鴨川市郷土資料館提供）

昭和二八年の本開帳は、一月の総代会で基本事項を取り決め、二月に厳島神社奉賛会を立ち上げ、日取りを四月一日から一二日の三日間と決定、直ちに地元はもちろん、東は銚子まで、西は木更津までの漁業関係者に船橋用漁船の提供協力を依頼した。

海岸から弁天島までの距離約四三〇mに、岸側に長さ約五四m、島側に約一二三mの棧橋を組み立て、その間を船橋でつないだ。大漁旗や祝旗で飾った大小四四艘の漁船を横に並べ、永さ七間(約二二m)の太い丸太を通し船と船を結び合わせ、歩きやすいように板を敷き渡した。一日目は、宮司・神輿・神社総代・各役員が、木遣り歌に送られてご本尊を迎えに島に渡り岸に戻ると、待っていた神輿・担ぎ屋台・山車が一齐に氣勢をあげた。その後一般参拝人の船渡りがはじまったという⁽¹⁷⁾。

○大浦の担ぎ屋台の出現

担ぎ屋台は、天保四年(一八三三)に磯村弁財天の祭礼に初めて披露されたのが始まりと伝えられている。その後磯村陣屋町にあった八雲神社の祭礼に披露されるが、それまでの神輿と山車に加えて、囃子(笛・大太鼓・小太鼓)を乗せた屋台が担がれるようになった。もとは八雲神社および磯村弁財天の氏子である磯村と貝渚村一部の宮本



写真3 大浦の担ぎ屋台巡行(鴨川市郷土資料館提供)

講・観音講・山若講・明神講という祭礼の組に各一基ずつ配属されたが、このうち二台が現存し、現在実際は漁師たちによる警防組織である大浦水交団が一台だけ担ぐ。

この屋台は、漁師たちが大漁祈願・無病息災・家族安泰を祭りに託し、海の様と「まき網船」を模したものと伝えられ、屋台は船、担ぎ手は海、三本の担ぎ棒は波を表し、屋台に乗った囃子は漁民の喜怒哀楽を表しているという【写真3参照】。この屋台巡行は、まさに漁民たちの信仰民具による漁民たちの祈願であると言うことができる。

昭和五十七年以降には、各神社の祭りが一つになった九月第二土日の鴨川合同祭に、他の神輿や山車とともに披露されるようになった。平成四年には、大浦水公団を保存団体として、市無形民俗文化財に指定された。⁽¹⁸⁾

磯村弁財天の祭礼は、毎年正月の祭礼と巳年と亥年の式年大祭である。祭礼の変遷として注目されることは、天保四年の式年大祭に、漁民たちの海の様と「まき網船」を模した「大浦の担ぎ屋台」が出現したことである。それは、磯村村社八雲神社をはじめとした天王信仰による神輿や山車の巡行という祭礼形式に影響されながら、「担ぎ屋台」というとくに漁民たちに特有な信仰民具を創出させたところに、彼らの信仰心がそれまでよりも強くなったことを伺うことができる。

四 鴨川弁天島に関わる信仰の変遷

第二・三章で見てきたように、現在の鴨川弁天島に関わる信仰は、いくつかなの変遷を辿って今日にまで至っているのである。ここでは、それらのうち明らかなものについて整理し考察する。

鴨川弁天島の歴史は、前章まで見てきた伝説や習俗の中では、大きく見て少なくとも次の五つの時代と変遷が指摘できる。

①古代・中世。弁才天像が金剛院に安置・管理され、祭祀されていた時代である。縁起では承和十三年（八四六）に遡り、慈覚大師開基を伝えていることから最初は天台宗寺院であったと思われる。当時は磯村前面の浮島には弁才天は祀られてはいないが、それ以前にすでに島は何らかの信仰を集めていたものと考えられる。また、何らかの理由で建久四年（一一九三）に真言宗に改宗されたものと思われる。

②近世前期。寛永一八年（一六四二）に浮島（後の弁天島）に遷宮され、慈覚大師作弁財天像を安置し「浮島弁財天」と称され、金剛院が別当寺として関与していた。この遷宮の時点に、信仰における一つの変化を窺うことができる。

③近世中期。元禄一六年（一七〇三）の大地震に伴う大津波によって建物とご神体が流失し、翌年宝永元年（一七〇四）にご神体が発見されて祠が再建された。しかしその後、享保一五年（一七三〇）には、それまでの慈覚大師作の弁財天女像に代わって、御万方大仏師空之進作の弁財天女の新像が祀られたのである。そして宝暦元年（一七五二）に別当寺金剛院が台地上に移転し、宝暦五年（一七五五）には弁財天の新本殿が造営されるにいたった。この時期に弁天島の管理運営や信仰に、ある変化が生じていることは指摘することができよう。

④近世後期。天保四年（一八三三）の祭礼に、大浦の漁民の担ぎ屋台が出現した時代である。このことは、もとは村社八雲神社の祭礼に山車や神輿の巡行が行われていた、近世の天王信仰による風流形式の影響を受けながら、漁業や漁村の発展などから、漁民たちの大漁祈願・航海安全等の信仰が高まり、海と船を表現した漁民独自の担ぎ屋台が考案され、出現・巡行するにいたったのであろう。

⑤明治時代。神仏分離を経て、厳島神社として登録され、完全に別当寺金剛院の関与がなくなった時代であり、今日に至っている。

以上指摘してきた変遷の中で、呼称についても「浮島弁財天」と呼ばれた時を経て、「磯村弁財天」と称するようになったのである。弁天島は、もとは金剛院の土地であったと伝えられるが、明治の神仏分離を経た現在は、

千葉県神社庁ではなく、大浦区の所有管理地となっている。それだけ漁民や地域社会における弁財天への思いや信仰が強いのであろう。

このように考えると、元禄一六年の大津波被害からの復興、新本殿造営と新尊像祭祀の頃から、次第に地域漁民による管理運営の度合いが大きくなり、「磯村弁財天」と称されるようになったのではないか。最初は寺院が主導した信仰が、時代とともに漁民や地域社会による信仰力によって展開・発展されていったのではないかと考えられる。

また、このような海岸地域における信仰に変遷を促してきた大きな原因として、具体的には寺院の改宗伝承や、尊像の流失伝承、新本殿の造営として伝えられているが、たびたびの地震・津波被害による地形変動と地域生活への影響は無視することができない。参考までに『千葉縣安房郡誌』¹⁹には、弁財天が祀られている南房総市の野島崎が、元禄大地震以前は孤島であったことなどが記されている。今後詳細な調査が必要にはなるが、これらが地形とともに地域の信仰・宗教の停止・変容・新生に影響していたことは、まず間違いないであろう。

最後に、五来重や野本寛一が言う海と陸の接点にあたる先島や海辺のムラの湾口島は、古く海の彼方の常世から神が依り着く飛び石にあたるという指摘についてである。それは、先に指摘したように弁天島は島に弁財天を祀る以前から神聖視されていたと窺えること、隣にある荒島についても、かつて磯村に所在した日蓮宗寺院が海中湧現の釈迦如来立像の感得伝承を伝えていることから、鴨川の弁天島や荒島も、まさにその信仰景観に該当すると言えるのではないか。つまり当弁天島や荒島にも、かつて神が依り着く信仰が存在した可能性は、原初段階や人々の深層においては否定できない。引き続き調査研究していきたい。

おわりに

千葉県鴨川市の弁天島を対象として、島に関わる信仰には、古代以来現在まで、五段階の画期を認めることが

できることを指摘した。

具体的には、地域に弁才天信仰を伝えた寺院が主体となり祀る必要があった時代、弁財天を島に祀り、寺院が別当寺として信仰をささえた時代、元禄の大津波を契機とした新弁財天像と新本殿造営の時代、天王信仰に影響され、祭礼に漁民の担ぎ屋台が出現した時代、明治の神仏分離により神道が管理する厳島神社となり、現在に至っている。

言うまでもなく、ここで指摘する変遷は、鴨川弁天島「磯村弁財天」の信仰伝承の分析により得られる、今後の調査研究の仮説で、他の文献資料等により検証されるべきものである。⁽²¹⁾

これらの変遷は、大きく見ると、寺院の力が強い時代から、後に地域社会の信仰力によって展開・発展していることを示しているのではないか。このように弁天島は、弁財天を勧請しているだけでなく、そこに変遷の歴史があるのである。また今後は、海岸地域における信仰生活の特徴として、地震・津波の被害による影響を考えていくべきではないか。

註

- (1) 笹間良彦『新装版 弁才天信仰と俗信』第一章 弁才天の様相」雄山閣 平成二九年（原本平成三年） 六〇～六二頁
- (2) 五来重『宗教民俗集成7「宗教民俗講義」』I・古代宗教における海と山」角川書店 平成七年 八～三九頁
- (3) 野本寛一『神と自然の景観論―信仰環境を読む―』第二章 地形と信仰の生成」講談社 平成一八年 四九～五七、一六〇～一六八頁（原本は『神々の風景―信仰環境論の試み』白水社、平成二年）
- (4) 鴨川市教育委員会『鴨川町のあゆみ』「鴨川町の古代・中世・近世」（浅岡力筆）平成三三年 一六～一七・三一頁
- (5) 令和五年、筆者現地調査。

- (6) 鴨川市『新訂 鴨川町誌』第二章 町村の沿革「平成六年（原本鴨川町、大正五年・一九一六）七頁
 - (7) 前掲(4)「鴨川町の近代・現代」(高林直樹筆) 八七～八八頁
 - (8) 令和五年、筆者現地調査。
 - (9) 前掲(4) 浅岡、(7) 高林 五七、八八、九四頁
 - (10) 令和五年、筆者現地調査。
 - (11) 前掲(7) 高林 一〇四～一〇五頁
 - (12) 令和五年、筆者現地調査。
 - (13) 千葉県『千葉縣寺院明細帳』(安房國安房郡4) 明治一五年(一八八二)
 - (14) 前掲(6)「第八章 神社」二四頁
 - (15) 前掲(4) 浅岡 五一～五三頁
 - (16) 千葉県神社庁『千葉県神社名鑑』「安房支部」 昭和六二年(一九八七) 八二五～八二六頁
 - (17) 太田辰蔵「磯村・弁天様の巳年本開帳について」鴨川図書館『鴨川風土記』創刊号所収 昭和五五年
 - (18) 鴨川市『鴨川市史・通史編』第六編 民俗(小島孝夫筆) 平成八年 九五二頁
 - (19) 千葉県安房郡教育会『千葉縣安房郡誌』大正一五年(一九二五) 九四頁
 - (20) 前掲(4) 三七～三八頁
- 宇田哲雄「南房総海岸地域の日蓮宗寺院磯村山釈迦寺所蔵『磯村山釈迦寺縁起』『儀礼文化』第十二号 令和六年
- (21) 千葉徳爾「地域研究と民俗学」『日本民俗学講座』朝倉書店 昭和五一年

(成城大学民俗学研究所研究員)